



平尾隆
綺麗な八重咲きの梅の花

梅の花も咲き、いよいよ春の陽気となってきました。桜の開花も待たれます。さて、今月のテーマは「アトピー性皮膚炎について」と「ギャンブル障害」です。アトピー性皮膚炎は身近な疾患ですが、新たな知見があるようです。あわせて薬の使用方法に気を付けましょう。また、ギャンブル障害は、本人のみならず周りの人も注意が必要のようです。ご一読ください。

アトピー性皮膚炎について

はじめに

皆さま、アトピー性皮膚炎をご存じでしょうか。アトピー性皮膚炎は日本人の約1～2割の方が罹っており、生まれつきのアトピー素因（アトピーの体質）に加え、その後には得られるさまざまな環境によって引き起こされる湿疹（皮膚のプツプツと痒み）が長く続く病気です。

アトピー性皮膚炎というどのようなことを想像されますか。アレルギーと答えられる人が多いと思います。しかし、ここ数年の皮膚科の話題としてアレルギーありきのアトピー性皮膚炎と言うのは間違いだろうと言われております。

病因

欧州では元々尋常性魚鱗癬（生まれつきの乾燥肌）の原因遺伝子であるフィラグリン遺伝子の異常がアトピー性皮膚炎の多くの方に認められたとの報告があり、日本人でもアトピー性皮膚炎の4人に1人がこの遺伝子の異常があります。また、異常がない場合でもフィラグリンの減少が見られる人が多いことが報告されています。フィラグリン遺伝子は皮膚表面の角質（垢）の保護をしており、これが異常もしくは減っていると皮膚に目に見えない傷ができやすくなっていると言えます。この見えない傷に身の回りにあるダニやハウスダスト、自分の汗などが触れると、体が異物と判断し取り除こうとし痒みを起こします。掻いてしまうと皮膚表面の異物は取り除かれますがさらに深い傷ができ、それを繰り返して徐々に治らない傷が出来るのがアトピー性皮膚炎の原因であると言えます。

治療

アトピー性皮膚炎の治療方法はスキンケア、薬物療法、悪化因子の検索と対策の3点が基本となります。今回はスキンケアと薬物療法に関して述べさせていただきます。

まずスキンケアですが、先ほど病因でお話した通り、目に見えない細かい傷がアトピー性皮膚炎の原因であり、これを改善させることでアトピー性皮膚炎の治療につながると考えられます。さらに、発症前のアトピー性皮膚炎の4分の1が保湿剤により予防できるとの報告もあります。このことから皮膚の乾燥の有無にかかわらず、常に皮膚の表面を保護するために保湿剤を塗ることが重要と言えます。

次に薬物療法ですが、大きく塗り薬、飲み薬、注射薬に分けられます。塗り薬では、炎症を取る塗り薬としてステロイド外用剤と免疫抑制剤外用剤を使います。ステロイド外用剤はステロイド内服薬と異なり、副作用が比較的少なく、効果も高いため、熟練した皮膚科医の指導のもとで安全

に使用できます。これに対し非ステロイド外用剤は効果が得られにくく、かぶれやすい点から使用は避けたい方が良いでしょう。また、以前2017年5月の健康さがみはらの記事にありますが、保湿剤も含めて塗り薬は十分な量で使用する必要があります。塗る頻度に関して、以前は症状の悪化がみられた場合にのみステロイド外用剤や免疫抑制外用剤を行う「リアクティブ療法」という手法の治療でしたが、症状がすっかり改善した後も週1～2回治療薬の外用を継続し悪化させない「プロアクティブ療法」（予防的治療）が推奨されるようになってきています。

注射薬では、近年アトピー性皮膚炎に対しても生物学的製剤（化学的に合成した医薬品ではなく生物が合成する物質（タンパク質）を応用して作られた治療薬）を使用することができるようになり、以前の塗り薬や飲み薬で治りづらかった症状も改善できるようになってきています。ただし、高価であり限られた医療機関でしか治療できません。また、注射のみで治療するのではなく、塗り薬も一緒に行わないといけない点や治療を中止することにより症状が再び出やすい点は理解しておくべきです。

まとめ

最近わかってきているアトピー性皮膚炎の原因や治療を含めて簡単に述べさせていただきました。適切な治療を行うことにより治りうる病気のため、正しい知識のもと症状を繰り返さないように治療を続けていく必要があります。

（相模原市医師会 田辺 健一）

子ども予防接種週間のお知らせ



期間 平成31年3月1日（金）～7日（木）

主催 日本医師会、日本小児科医会、厚生労働省
予防接種に対する関心を高め、予防接種率の向上を目的として、上記期間を「子ども予防接種週間」といたしました。

期間中、協力医療機関において、通常の診療時間帯に予防接種を受けにくい人々に対し、予防接種を行います。

※子ども予防接種週間における協力医療機関の詳細情報につきましては相模原市医師会ホームページ (<http://www.sagamihara.kanagawa.med.or.jp/>) をご覧ください。

お問い合わせ先 相模原市医師会事業課 ☎042-756-1700

相模原市内科医会 市民公開講座

ながびく咳 ～その症状、放っておいて大丈夫？～

日時 平成31年3月9日（土）午後3時から

場所 相模原南メディカルセンター 大会議室

講師 東大沼内科クリニック 院長 高田 信和 先生

入場無料、定員先着150名 ※希望者は直接会場へ

※事前に質問を受け付けています。詳しくは、市医師会ホームページをご覧ください。

問合せ先 市医師会事務局 ☎042-755-3311

